

〔源氏物語三十四〕正月廿三日、子の日なるに、左大將殿の北方わかなまいり給。○申けふの子日こそなほうたてけれ、玄ばしは老をわすれても侍べきをときこえ給、かんのきみもいとよくねびまさりるものくしきけさへそひて、みるかひあるさまし給へり。

わかな葉さすのべの小松をひきつれてものとの岩ねをいのるけふかな、とせめておとなひ聞え給、ちんのをしきよつして御わかなさまばかり參れり、御かはらけとり給て、
小松ばらするのよはひにひかれてやのべのわかなもとしをつむべきなどきこえかはし給へり、上達部あまたみなみのひさしにつき給、

〔拾遺和歌集一〕題しらず

ねのひする野邊に小松のなかりせば千世のためしに何をひかまし

〔後拾遺和歌集一春〕三條院の御時に上達部殿上人など子日せんとし侍けるに、齋院の女房、ふなをかにものみんとしけるをとまりにければ、そのつとめて齋院にたてまつり侍ける、

堀河院右大臣

とまりにし子日の松をけふよりはひかぬためしにひかるべきかな

〔後拾遺和歌集一春〕小野宮太政大臣○實頼○藤原の家に子日し侍けるに、よみ侍ける、

清原元輔

千年へんやどの子日の松をこそ外のためしにひかむとすらめ

〔年年隨筆五〕此ころの歌よみ、子日といふ題に、小松をよみて若菜をよます、子日遊の子細を玄らざる也、後撰集子日の歌五首ある、小松のなき歌もまじれ、ど、若菜よまぬはなし、小松も菜の一種なり、されど千年萬代とめでたる物なる故、とりおきたるにて、つひには小松引ばかりの事に人おもへり、がの後撰集のうた、朱雀院の子日におはしましけるに、さはる事侍りてえつかうま